

発行所
カトリック長崎大司教区
本部事務局
〒852-8113
長崎市上野町10-34
カトリックセンター内
TEL 095(846)4246
FAX 095(842)4460

福音宣言

晴佐久 昌英

東京教区司祭

司祭になってちょうど二十年。現在、東京教区の高円寺教会で働いている。赴任してから四年間、信徒と共に「福音宣言する共同体」を目指して、努力と工夫を重ねてきた。

その結果、主日ミサの参加人数が目に見えて増加し、信徒の活動グループも増え、洗礼者の数も倍増した。受洗者数は、この四年で言えば2004年が102人、2005年が90人、2006年が110人。ちなみに、このような実践を始める前の2003年の受洗者数は15人だった。所属信徒数は2003年当初の1458人が、2006年末には35人増の1773人となった。

青年層も厚くなり、召命を考える青年が増えたので、召命を共に学び祈りあう、「召命塾」も発足した。そこか

ら昨年1人、今年1人の教区神学生が誕生し、来年の受験を決心している者も1人、他に現在7人の塾生がいる。もちろん全員、当教会所属信徒である。数字はあくまでも数字に過ぎず、活性化のひとつの目安ではないが、現在の高円寺教会に働いている聖霊の息吹の豊かさを端的に物語っていると思う。

では、「福音宣言する共同体」とは、具体的に誰が、何のために、何をしているのか。一言で言えば、「キリスト者が、福音を必要としている人に、福音を宣言している」、それだけである。至極当然で単純なことなのだが、ここで大切なのは、「宣言」である。

本来、福音は説明するものではなく、宣言するものである。何らかの説

明も必要ではあるが、宣言されて初めて福音は福音になるのであって、宣言を伴わなければ何の役にも立たない。そして、近年の教会に最も欠けているものが、この「宣言」なのではないか。

迷子になって泣いている子どもにいくら母の愛について説明しても、泣き止むはずもない。しかし、母親が抱きしめて、「ほら、もうだいじょうぶよ」と言えば、たちどころに泣き止む。この混沌の時代、迷子になって途方にくれている人類に、教会は何を語っているのだろうか。これまで、神の愛について、キリストの十字架と復活について、教会の意義と秘跡の尊厳について、どれほどたくさん「説明」がなされてきたことか。しかし、魂の孤独に震え、生きる意味を見失い、自分の存在価値を感じられずに闇の底に沈んでいる人たちに、その説明は何ひとつ届いていない。入門講座の第1回に出席したきりで二度と来ない無数の人たちが、本当は何を聞きたかったのか、もう一度誠実に考える必要があるのではないか。彼らは、ひとこといい、福音を「宣言」してほしかったのではないか。

「つらかったね。もう大丈夫だよ。神は、あなたを愛している。だからあなたを生んだし、今日まで慈しみ育ててきたし、今こうして教会に招いてくれた。安心してほしい。ここに救いがある。私たちキリスト者の集いを信じて、この信仰の家族に入ってほしい」

そもそも、神は「自分の愛を宣言す

るお方である。キリストはその神とひとつになって、神の愛を宣言したのである。教会はそのキリストとひとつになって、神の愛の宣言そのものとなったのである。教会の存在意義は、この宣言にある。「絶対の権威と信仰をもって、いまここで、あなたに、撤回不能なものとして、神の愛と救いを宣言すると、それが、現実となる」。これを、「福音宣言」と呼びたい。

現在高円寺教会では、ミサにおける福音宣言を頂点に、各地区、グループ、入門講座での福音宣言、家庭内での福音宣言、教会売店「天使の森」や司祭館内サロン「お茶の間」での福音宣言、ホームページや「高円寺教会で洗礼を受けませんか」パンフレット等での福音宣言など、信徒一同で「大丈夫、神様の愛を信じましょう」と宣言し、「いいから一度、ミサにおいでよ」と招いている。

そうして訪れた人を、洗礼委員会のもとで活動する40名の入門係がお世話する。洗礼面接などで、「この教会に出会えたおかげで命を救われた」と涙をこぼして語る求道者たちを見てみると、まだまだ教会は初代教会ののだと、つくづく思う。何しろ、この日本には福音宣言を求めている人が、あと一億人いるのだから。

今年2007年、4月7日の復活徹夜祭での受洗予定者は、2月末日現在、86人。主任司祭は、全員と面接を終えている。

「福音宣言」



Q. 「福音宣教」ということばは聞いたことがあります。 「福音宣言」とは初耳です。ほかに「福音化」ということばも聞くことがあります。どうしてこんなにいるいろいろな方が変わるのですか。

A. いろいろな表現が出てくる背景には、何とかしてピンとくる方法でわたしたちの救いそのものであるイエス・キリストを世に紹介したいという強い動機があることは確かです。その使命感が強いことの表れではないでしょうか。

ご存知のように、公会議以前には「布教」ということばが使われていました。このことばそのものに責任はないのですが、このことばには教勢拡大のために高圧的に教えを広めようというイメージが強すぎる難点がありました。

「宣教」ということばには使命感を自覚さ

せる良いイメージがあるのですが、それだけに自然体ではない特別の構えと覚悟を迫る感じがあつて「自分にはとても」という印象を与えてしまう恐れがなきにしもあらずです。

「福音宣言」ということばは、第一面で紹介されているように、晴佐久神父さまが自分の実践の中から生み出したことばで、公用語として使われているわけではありません。

昨年（2006年）11月22日の司祭研修会で紹介されたものです。一面に記されているような目に見えるしるしを伴って宣教がなされているということ、とても感動的でした。

Q. この「福音宣言」ということばを使うと、「福音宣教」という表現より、もっと福音が伝わるようになるのでしょうか。

A. それは、第一面の文章をよく読んで自分で理解していただくのが一番よいと思います。

晴佐久神父さまは文中で「迷子になって泣いている子どもにいくら母の愛について説明しても、泣き止むはずもない。母親が抱きしめて、『ほら、もうだいじょうぶよ』と言えば、泣き止む。この混迷の時代に、教会は何を語ったか。」と問いかけています。

晴佐久神父さまはすでに宣言され実現されている人間の救い、つまり、人間解放宣言をあのある有名なリンカーンの奴隷解放宣言にたとえて説明しておられます。

例えば、リンカーンが奴隷解放宣言をしました。それは、大統領という権威が、すべてのアメリカ国民に、奴隷を解放すると宣言したのであって、もはやだれも逆らえませぬ。権威の元にあるすべての人にそれが通用する。「うちの村は、ちょっとそれは当てはまらない」とは言えない。宣言された以上は、もはや撤回できず、それは現実となつて、すべての奴隷が解放される。

神が福音を宣言する。これは究極の宣言です。神の言葉であるイエス・キリストがしたことは、言うなれば『神の国の開始宣言』だった。神の国を神が始めると言った。絶対の権威がそう言ったのだから、だれも取り消せない。そして、それは、神の元にあるすべての人に、この世で

造られたすべてのものに通用して、必ず実現する。それはもはや撤回不能で、事実、もう現実になっているのです。オリンピックの開会宣言みたいに、神様が「これより神の国を始めます」と宣言したのですから、こんな安心なことではない。そして、それはすべての人が知らなければならぬ。たとえば大統領が奴隷解放宣言をしたのに、まだその宣言を知らない村があったとしましょう。そこで奴隷がまだ苦しんでいたとしましょう。心ある人なら、そんな村に一刻も早く、「もう、奴隷は解放されたんですよ！」と福音を告げ回るんじゃないですか。同じことです。私たちは、あまねくこの神の国の開会宣言をすべての人に伝えていかなければならない。もう、私たちは罪と死から解放されたのです！と。それを私は「福音宣言」という言葉を用いて表現しております。

〔「国際聖書フォーラム2006講義録」より〕

Q・神さまの人間解放宣言は実現している、と言われてもわたしたちは相変わらず、悪におちいるし、社会全体にもよるこびとより、苦しみ、悲しみが多し、とても救いの実感はないのですが・・・。

A・言われることはよく分かります。ましてや、このせちがらい世に救いの実感はそう簡単には湧いては来ないのも事実です。

リンカーンの権威ある解放宣言も、長い間奴隷生活を強いられてきた方々には、すぐには実感として伝わらなかったでしょうし、人間扱いしていなかった人々も、にわかにはこの宣言を認めることはできなかったでしょう。

しかし、宣言は宣言として撤回不可能の現実だったのです。

この宣言そのものから、その実感へのプロセスを進行させていくこそが、教会の最重要任務なのです。

現代社会はお金が最重要価値と考えさせられ、勝ち組、負け組の格差が増長され、そのひずみがいじめ現象に現れてきている、いわば救いなき状況に見えます。

しかし、よく目を凝らして見れば、雪の下にも春を待って、いのちの芽が吹き出るように、人間解放宣言に対して、みずみずしい感度をもって、活き活きと息づいている人々もいます。

Q・本当に福音を福音として、これが必要とする人々に届くようにするには、具体的にどうしたらよいのでしょうか。

A・そのためのキーワード（鍵となることば）は晴佐久神父さまの言う「福音宣言」を、共同体づくりということではないでしょうか。

長崎教区の方針に置き換えれば「宣教する教区づくり」ということになります。

同じ方針のもとに進んでいるのですが、もし違うとすれば具体的なプランと実践と、言うことかもしれません。

ミサにおける福音宣言を頂点に、各地区、グループ、入門講座での福音宣言、家庭内での福音宣言、教会売店「天使の森」や司祭館内サロン「お茶の間」での福音宣言、ホームページや「高円寺教会で洗礼を受けませんか」パンフレット等での福音宣言など、信徒一同で「大丈夫、神様の愛を信じましょう」と宣言し、「いいから一度、ミサにおいでよ」と招いている。

そうして訪れた人を、洗礼委員会のもとで活動する40名の入門係がお世話する。

福音を伝えるという一点ですべての活動をつなぐことは、言われてみれば、教会にとって至極当然なことでもあります。

いいから一度、ミサにおいでよ



新しい要理

「共に歩む旅」(5)

第三課 「キリストに

従うとは・・・」



〔進行係〕

(参加者を歓迎して、十字架の印をしながら集いを始める)
「一人か二人の方が祈りで神さまをこの席に招いてくださいませんか。」

(誰でも自由な祈りを捧げるか、以下の例文で祈ってもよい)
・主よ、私たちと共にいてください。
・主よ、あなたのみ言葉に耳を傾けることができるよう私たちを導いて下さい。

A. 私たちの生活

〔進行係〕

「次の文はウエストミンスター大

聖堂の地下墓地に埋葬されているある司教様の墓碑に記されている文です。どなたか次の話を読んでくださいませんか。」

「私が若くて自由で想像力にあふれていた時、私はこの世を変えるという夢を持った。もう少し年を取り知恵を得た時、私はこの世が変わらないことを知った。それで私の望みを少しせばめて、私の生活している国を変化させようと決心した。しかしそれもやはり不可能な仕事だった。

たそがれの年になった時、私は最後の試みとして最も近い私の家族を変えようと決心した。しかし、誰も変わらなかった。死を迎える

床に横たわっている今、私はふと悟った。万一私が自分自身を先に変えることができたなら、それを見て家族が変化したはずだった。また、それに勇気を得て国をもっと良いほうに変えることができただろうに。そして誰かがそれを見、知ることができたかもしれない。そのとき、この世までも変化させることができただろうに。」

(「私の靈魂の鶏肉のスープ」の中から)

〔進行係〕

(参加者たちに質問する)
①「自分の死が近づいたとき、司教様は何を悟りましたか。この文章に対するお互いの考えを話し合ってみましょう。」

②「『私が変わってこそこの世が変わる』という言葉はどんな意味でしょうか。家族や隣人との関係でそんな体験がありますか。」
(一組対話を交わしてから全体の集いで発表する)

B. 神のことば

私たちは神の愛を実践すること

によって神の子となります。
神が本当に望まれる生き方とはどんなものか聖書から学びましょう。

〔進行係〕

「どなたかエフエソ4・17・5・1を読んでくださいませんか。」

---聖書を読む---

「他の方がもう一度読んでくださいませんか。」

〔進行係〕

(参加者たちに質問する)
①「神の愛を受けた子どもは、どんな姿勢を持たなければならなと思いますか。」

②「聖書の文の中で、日常生活において私がいざばら犯す過ちがありますか。」

私たちは誰でも自己実現を望みます。本当の自己実現はすべての人間の原形であるキリストに似る時です。私たちがキリストに似たものとなり、キリストと一致する時、私たちが心の深い所で希望していたことが実現されます。

「私がいただいた召命は愛です」というマザー・テレサのみ言葉のよ

うにキリストの愛を慕い、そのお方の十字架と復活の神秘に参与することが真理と生命の道です。

「そればかりか、わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくたと見なしています。キリストを得、キリストの内にいる者と認められるためです。わたしには、律法から生じる自分の義ではなく、キリストへの信仰による義、信仰に基づいて神から与えられる義があります。わたしは、キリストとその復活の力とを知り、その苦しみにあずかって、その死の姿にあやかりながら、何とかして死者の中からの復活に達したいのです。」

(フィリピ3・8・11)

【参考聖書】

- * マタイ 16・24・28… イエスに従う道
- * マタイ 19・16・26… 金持ちの青年、らくだと針の穴
- * ルカ 12・33・34… 富を天に積む
- * ルカ 14・7・11… 末席に座れ
- * I コリント 13・1・13… 愛

C. さらに一歩進んで 旅を続けよう

私たちの周辺には、たくさんのお物を持っていながら、幸せな生活ができない人々がいます。自分が他人よりいい格好をするために、自分の利益のために、他人より豊かになるために、一度自分のものになったものは離さない生活をしなかつたか、しばらく考えてみましょう。イエスは私たちのために自分の体を私たちにくださいました。イエスは神の愛を見せながら、私たちに人生の意味を教えてくださいます。

【進行係】 (参加者たちに質問する)

- ① 私の長所を一つずつお互いに話してみましよう。
- ② 今自分の姿を変えることができればと望むものを、一つずつ順番に話してみましよう。そして次の1週間これを実践してみ、感じた点を次の集いで話してみましよう。

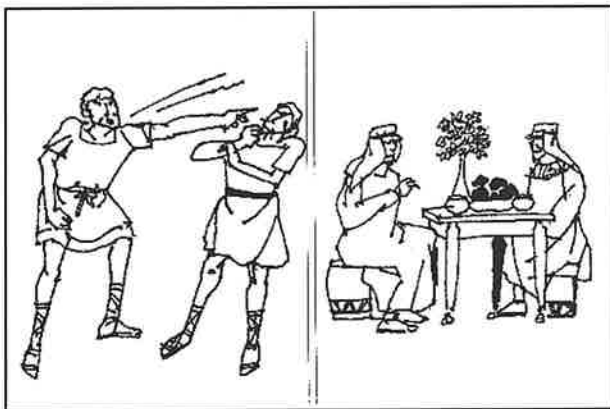
【進行係】 (「栄唱」の祈りをしながら集いを終わります。)

「栄光は父と子と聖霊に、始めの

ように今もいつも世々に。アーメン。」

【進行係りの心得】

* 自分の長所を話すことは、日本人には少しはばかられることかもしれない。人間は神のかたどりであるので、必ず神に似た長所があり、その長所を認め、ほめたたえることは、すなわち神をたたえることになることを学び、できない、やらないという間違つた謙遜を修正するよう努める。



【覚えましよう】

11. 聖書のいろいろな書や、箇所はどのようにして探しますか。

聖書を探す練習を次のように一緒にやってみましよう。

* 創世記を探してみましよう。

・それは旧約聖書の最初に出てくる書物です。

* マタイ福音を探してみてください。

・それは新約聖書で最初に出てくる福音書で、4つの福音書はマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの順です。

12. 聖書の章・節はどのように区分されましたか

聖書の章・節は1550年頃、聖書を読むとき便利なようにつくられました。

聖書の章節を標記するときには簡単に次のように記します。

ルカ福音第3章5節

↓ ルカ3・5

マルコ福音第8章1・5節

↓ マルコ8・1・5

「発達障害」を知る

(1)

西村良男

上手に出来るようになったわね!



もっと練習
しなさい!



はじめに

3年生のアツ子ちゃんは、いくら練習しても、文字をうまく書くことができません。文字を裏返しに書くこともあります。「もっと練習しなさい」と、いつもお母さんに叱られます。

4年生のノンちゃんは、勉強なのに立ち回り、友だちにちよっかいを出します。持ち物をよく忘れます。順番を待てずに、友だちとよくケンカになります。

LD（学習障害）という言葉を聞いたことはありませんか？
ADHD（注意欠陥多動性障害）はどうですか？

これらは、アスペルガー症候群などをも含めて「発達障害」と言われています。最近、新聞やテレビなどでも報道されるようになりました。

右に挙げたアツ子ちゃんはLDを抱え、ノンちゃんはADHDがあると思われれます。適切な指導や周囲からの支援がないと、本来この子たちが持っている優れた才能も活かせず、次第に自信をなくして引きこもったりして、不登校につながる場合があります。

現在、発達障害を持つ子ども

ちは、普通の小中学校のクラスに一人か二人の割合でいると言われます。原因ははっきり説明されておらず、中枢神経に何らかの機能障害があると推定されていますが、一部の症状を除いて有効な医学的治療法はありません。けれども、周囲の人たちの支援や適切な指導によって、障害によるリスクをいくらかでも小さくすることが出来ます。

発達障害は、決して学齢期の子どもだけの問題ではなく、一生涯何らかの困難を伴うとされています。そこで、国は発達障害者支援法を制定し、2年前から、「国と自治体は、発達障害を持つ人たちの支援しなければならない」としました。

発達障害は外見上の見分けがなかなかつきませんので、周囲の人からは「本人の努力が足りない」とか「親のしつけが悪い」、「愛情不足のため」などと言われるがちですが、これは間違った考えです。本人の怠けのためでも、しつけが悪いためでも、愛情不足のためでもありません。本人や親だけの努力では解決できない問題があるの

です。

これらの障害に苦しむ人々に支援の手を差し伸べ、共に歩むことが、今、私たちに求められています。そのためには、私たち自身がこれらの障害に苦しむ人々に、いつも温かいまなざしを向けていることが必要になります。

まずは、これらの人たちのことを「知る」ことから始めましょう。

第一部 LD

学習に必要な

能力に生じる障害

「LDとは、基本的には知的な遅れはないが、読む、書く、話す、聞く、計算する又は推論する能力のうち、特定のものの習得と使用に著しい困難がある」とされています。大抵のことは他の人と同じようにできるため、障害があることに誰も気がつかないで、小学校に入って学習を始めた頃からおかしいと気づくことが多いようです。学習の内容が難しくなる3、4年生頃になると、次第に目立ってくるようになります。

LDの子たちの苦手なことをまとめると、次のようになります。ただし、これらの特徴がどの子にも表れるとは限りません。程度にもそれぞれ違いがあります。

① 学力に困難がある

- ・音読が苦手である
- ・形の似た文字を間違える
- ・枠の中に文字を書けない
- ・簡単な計算につまずく
- ・図形が重なると分からなくなる

② 話し言葉に困難がある

- ・言いたい言葉が出てこない
- ・集団の中での聞きわけが困難

③ 社会性に困難がある

- ・他人の気持ちを察することが苦手・・・
- ・などが苦手・・・

問題行動の場面ばかりが出ていますが、LDの子がいつも問題行動をおこしているわけではありません。一見、問題に見える行動も、そうせざるを得ないその子なりの理由があるのです。

例1.

国語の苦手なヨシ子ちゃん

4年生のヨシ子ちゃんは国語の時間になると、いつも保健室に行きます。本を読む時に行を飛ばして読んだり、同じ行を何度も読んだりするので、みんなに笑われたりするのが恥ずかしいのです。国語の時間は、できるだけ先生と目を合わせないようにしています。先生からは、「もっと練習してきなさい」と言われます。

また、見たものを区別して読み取るのも苦手です。「は」と「ほ」や「わ」と「ね」などの似た形の文字を間違えて読んだり書いたりします。これらのことは小さい子どもにはよくあることで、小学校入学のころになれば区別できるようになるものですが、ヨシ子ちゃんは4年生になっても、うまく区別できません。



【ヨシ子ちゃんへの対応】

LDの人は、細かい部分にばかり注意が行って、全体を見失う傾向にあります。ヨシ子ちゃんが行を間違えて読むのもそのためでしょう。本を読むときは、文字を一字一字指でおさえながらゆっくりと読む練習をしたり、できるだけ大きな文字で、行間の広いプリントを準備してあげたりすることも効果的だと思います。そのためには誰かの援助が必要になります。

「は」と「ほ」などの似た形の文字については、「は」と「ほ」の異なるところを本人に見つけさせて、その違いをしつかり確認させると効果的です。少しずつ練習をし、うまくいったらほめてやることで自信を持つようになります。このことが、長続きして効果を上げる源になります。

知らなかったために、悪気はないのに偏見を持ってしまっていたということは、ほかの分野でもよく起こることです。この文がそうした先入観を少しでも払拭するきっかけにでもなれば幸いです。

《参考図書等》

- ・シリーズ「発達と障害を考える本」
- ①④ (ミネルバ書房)
- ・「実力を出しきれない子どもたち」(NPO法人・えじそんくらぶ)
- ・LD児の教育的援助に関する研究 (山口県教育研究所)
- ・特殊教育研修報告書 (宮城県教育センター)
- 《サイト》
- ・日本LD学会 JAPANESE LD STATION 東京都教育委員会 ホームページ

発達障害があるかどうかは、軽々しく判断せず、教育相談所や医療機関などに相談することが大切です。

このシリーズでは、発達障害の特徴的なさわりの部分だけを紹介いたします。もっと詳しく知りたい方は、書店で関係図書を求められるか、インターネットで検索してみてください。



イエス・キリストについて

Q

私たちの救い主である方は、「イエス」という名前で呼ばれてもいますが、ただそれだけではなく、その名前に「キリスト」を付けて「イエス・キリスト」と言われています。また新約聖書の中でも、そのように記述されているところがたくさんあるように思えます。つい先日、聖書を勉強していて、「キリスト」がヘブライ語の「メシア」のギリシア語訳であり、「油注がれた者」という意味も知りました。そのメシアについて少し説明して下さい。また旧約聖書を読んでも、様々な人が油を注がれて王や祭司に就いていることが分かります。そこで、「一人に油を注ぐ」ということに疑問を感じました。「油を注ぐ」には、一体どのような重要性があるのでしょうか。またその起源は、どこに見出されるのでしょうか。

A

まずは、イエス・キリストについて述べていきましょう。言われる通り、「イエス」だけではなく「イエス・キリスト」で書かれているところが、新約聖書の中にたくさん見られます。しかしその頻度には、ある特徴があるように思われます。まず新約聖書の中で「イエス・キリスト」という記述は全部で134箇所ありますが、そのうち福音書全体ではわずか5回で、残りの129回は福音書以外の新約の書に出てくる

ということになります。でもそのほとんどが、パウロの書簡に集中していると言っても、決して言い過ぎではありません。

なぜこのように福音書には少なく、その他の書に多いのでしょうか。それはその両者の間に、決定的な違いがあるからです。もつと具体的に言えば、福音書はその内容からして、イエスの生前のこと、言い換えればイエスが亡くなるまでのことが書かれています。それに対して、その他の新約の書には、イエスが亡くなった後に、イエスの精神を受け継いだ使徒たちの働きによって教会が各地に設立され、イエスの教えに生きる共同体が生まれていき、その時の様子や、各々の教会共同体が抱えていた諸問題に対する指針やそれらを克服するように促す勧告や激励などが書かれています。福音書を読む限り、イエスがまだこの地上におられた時、人々（ユダヤ人）は、彼を救い主メシアとして受け入れていませんでした。彼は、彼らにとってメシアではあり得ませんでした。それ故、たとえ彼が神との親しい関係を人々に語っても、また神についての真理を述べたにしても、彼は神を冒瀆する者、神の名を汚す者でしかなかったのです（マタ9・3、26・65、マコ2・7、ルカ5・21）。恐らくその点を考慮して、福音記者たちは、イエスをこの名前だけで表現し、メシア・キリストとは表記しなかったのでしょう。だから単に「イエス」と言われているのは、そのためだと思われまます。しかし福音書以外の書では逆に、イエスがメシアであるということが前提であり、その名によって救われることを信じている共同体が描かれています。だからイエスこそ、あるいは彼だけが真のメシア・キリストであるわけですから、「イエス・

キリスト」という言い方は実に相応しいのです。

ところでこのメシア・キリストはおっしゃる通り、「油注がれた者」という意味です。旧約聖書では、「イスラエルの王」であり、「祭司」であることを意味していました。しかし新約聖書（上述のことを加味すれば、厳密には「使徒と教会」）においては、唯一イエスのみに対して言われる表現です。一般にメシアとは、イスラエルを治め、その民を導く指導者でした（ダビデがその理想的人物でした）。しかし後に、イスラエルが近隣の強国に抑圧され、民が国から追われて離散する憂き目を体験しましたが、それでも彼らはイスラエルの再興に希望をおき、それを実現するダビデのような偉大な人物を求めました。つまり、民はイスラエルの未来を託し、自分たちを窮地から救い、開放することが出来る人、メシアを望んでいました（そういう意味では終末的ですが）。だから私たちキリスト者は、そういうメシアの姿をイエスと重ね合わせて見ているのです。しかしイエスがメシアであるのは、キリスト者にとって決して政治的な意味ではなく、真の人間の建て直しと救いをもたらす霊的な意味においてです。イエスこそが真の救い主であり、全人類の希望を実現して下さる方です。だから私たちの信仰は彼を信じることにあり、また私たちの救いと希望が彼において実現することを信じることにあります。使徒たちの、「主よ、イスラエルのために国を建て直してください」という問いは、常にキリスト者全体の期待溢れる問いなのです。

― 次号に続く ―

（湯浅 俊治）



ペトロ岐部神父様 を想う



車いすをかすかに動く左手であやつり、はにかみながらお客様へ「ありがとうございます」と言ってくれるKちゃんは、通所授産施設「サクラ」のパン工房、ホーリイデいの販売員です。

彼の生活はすべてにおいて介助がいます。でも毎日元気にパンの販売に出かけます。パン作りのTさんは、上手にパンを作ることが出来ますが人前に出ることが嫌なのです。たがいに支えあいながら、出来ないことをかばい合いながら頑張っています。

Kちゃんは昨年の4月に高校を卒業してサクラの仲間になりました。

初めてのお給料のとき、「僕、涙の出るくらいうれしか」と言い、家族と食事に行ったら「僕のお金を出してよかよ」ボーナスをもらったら、「今年のクリスマスケーキ代、僕のお金から出してよ」。お母さんからこんな報告をいただくたびに、ああ、神さまがまた、私たちに報酬を下さったと胸が熱くなり、頑張らなくてはと思うのです。

私たちは8年前のザビエル渡来450周年記念オペラ実行委員会から、小規模作業所「サクラ」を経て通所授産施設「サクラ」の開所まで来たのですが、振り返ると神さまはすべてにおいて準備して下さったのだと思います。

ザビエル渡来450年祭のオペラの時は、その2年目の創作オペラ「二十六人の殉教」に感動して、「平戸でもオペラを！」と頑張りました。二十六聖人のオペラがどうなるかもわからないうちから、絶対にすばらしいオペラだと決め込んでいた私。今思うとおかしいことのようにだけど、そう思っていましたし、そう確信できたのはペトロ岐部神父様の『つりさげられそうろう』というオペラをテレビで見て、とても感動していたからでもあります。

岐部神父様のオペラを見たいと、大分、東京と調べましたが再演はありませんでした。偶然に見たオペラから聞こえた名前「ペトロ・カスイ・キベ」。それは私が寄宿舎にいたとき、同室の優しいお姉さんから聞いていた名前でした。

彼女と私は俗に言う当時の新信者。彼女から「どうして信者になったの？」と問われ、私は、「父がシスターから怒られて、私を純心にお願ひして信者にしたの」と答えました。

私が彼女に同じ質問をすると、「私の家は江戸時代からの古い家で、開かずの間があった。でも家を建て直すときに崩したら、その部屋からクリスチヤンの物が出てきて、自分の家はペトロ・カスイ・岐部に縁ある者だったらしい。それで家族全員信者になった」と答えました。なんて素敵なことでしょう。二人でこんな話のやり取りをしたことを忘れずにいました。

そして、テレビでペトロ岐部神父様が逆さ吊りで殉教されたことを知ったのです。その時のショックと感動が、私を二十六聖人のオペラへと駆り立たせ、平戸地区婦人会総勢60人で観賞し、見終えたときの大きな感動は、次の日の巡礼もさることながら、今でも忘れることが出来ません。そしてそれが中浦ジュリアン神父殉教オペラ「忘れられた少年」につながって行ったことに神さまの大きな計らいをひしひしと感じます。

神さまは自然な形で私たちに感動を下さいます。まず、私は40年前、寄宿舎の優しいお姉さんを通してペトロ岐部神父様と出会いました。テレビのオペラを通じて、その存在は大きくなり、毎年国東半島へ巡礼を夢見ていながら実行できずにいます。でもこのように三つのオペラがつながって、今の私たちが生かされている場があり、「サクラ」の活動があるのです。

神さまは私が洗礼を受けたときから準備して下さっていたし、また、たくさんの方からの大きな愛を届けて下さっているのです。そして、さらに私たちが今、信者として生きていけるのは多くの殉教者が生命をかけて証をしてくださったからです。ペトロ岐部神父様との出会いに感謝しつつ、祈りのうちに列福の日を待ちわびています。

(末永 さち子)



叙階式に与って・・・



2月11日(日)に、120名の司祭、1600人の信徒が集まる中で、高見大司教司式による、司祭・助祭の叙階式が浦上教会で行われた。一人の司祭(教区)と、三人(二人は教区・一人はアウグスチノ会)の助祭の誕生の喜びを共にした。そこで、今回はこの叙階式に与った方から、感想をお聞きした。

*叙階式には毎年与られているのですか？

仕事の都合上、毎年与ることができませんが、なるべく、喜びを共にしようと心がけています。今年私は私が所属している川棚教会の川添神学生が、助祭に叙階されるので、どうしても与りたいと勤務を替わってもらって与りました。昨年選任式にも、もちろん与りました。

*今年、叙階式に与られた感想はいかがですか。

こんなに大勢の司祭方、それに信徒の方々が一同に集まって祈ることは、とても素晴らしいことだと

思いました。

叙階に先立ってのお話をしてくださった中で、故松永司教様の話は心に残り、この司祭の誕生がどれほど教会にとって素晴らしいものであるかを、改めて感じることができたものでした。

昨年「選任式」で祭壇奉仕者になられ、今年助祭になられた方々が、来年は司祭になれるのだ!と思うと、感慨無量でした。更に、この1年は熱心に祈らなければ・・・と思いました。

司祭叙階は特別なものがありますね。特に新司祭への按手が沈黙の中で行われる間、私も聖霊の働きによって、新司祭が、最後まで司祭職を全うされますようにと心から祈りました。

また、特に今年は長崎で殉教した二人の司祭が列福される予定なので、迫害の時代にあつて、どうしても司祭になって働きたいとの熱い願いを持って、どんな困難もいとわずに司祭叙階の恵みを受け、司祭としての道をまっしぐらに進まれた二人の殉教者のように、人々の救いのために労苦を惜しまずに捧げられる司祭となれるようにと祈りました。

最後の新司祭のご両親への祝福は、これまで育ててくださったご両親への大きな感謝として、最高の祈りだと胸が熱くなりました。

*何か、叙階式に希望がありますか。

昨年、叙階式の中で、新司祭の派遣場所が紹介され、参列者からは賛否両論でしたが、やはり、この頃までに司祭の次年度の人事が決まっていると、この新しい出発に際して、新しい派遣の発表というのは相応しいのだと思いましたがどうでしょうか。

また、参加者が大人数でも、全教会(長崎教区)の喜びであり、感謝ですから、一緒にお祝いが出る方法があればいいなあ・・・と思ったりしました。

さて、長崎教区では、今年「選任式」において、一人の祭壇奉仕者、一人の朗読奉仕者が任命され、二人の助祭の誕生でした。このままいくと、来年も司祭、助祭の叙階式が行われます。しかし、司祭の高齢化が進む中で、これからは、一つの教会に一人の司祭を送ることは難しい現状になってくるでしょう。

そこで、この紙面を借りて、皆様へのお祈りと召し出しへのご協力を願って、司祭への召命の現状をお知らせいたします。

*小神学校

・長崎教区19人・鹿児島教区4人・大分教区2人
・福岡教区1人

*コレジオ

・長崎教区7人・大分教区1人
・福岡サン・スルピス大神学院
・長崎教区9人・鹿児島教区1人・大分教区3人
・福岡教区3人・那覇教区1人



叙階された谷脇司祭

青少年委員会より…

第13回 日韓学生交流会

違いが豊かさに



2月22日～28日、第13回日韓学生交流会が韓国の清州・大田教区にて開催された。18歳から25歳までの青年17名（長崎教区4名）ずつが日韓双方から参加し、日本から3名の司祭と通訳のシスター1名が同行した。

日韓学生交流会は、日本と韓国の司教団の間で築こうとしている和解に向けた交流を「学生の間でも」という韓国のある司教様の提案を受けて始められ、すぐに1997年パリ開催ワールドユースデーに合わせる形で第一回交流会をルルドで開催、その時の参加者により「今後も日韓相互に継続していく」と決定され回を重ねている。この交流会は「日韓学生の出会いと和解のきっかけの場」になることを目的とし、その時々参加者が、今後の真の和解に向かって歩もうと思える交流会を作り上げてきている。毎回テーマが決められ、今回は「神の愛、隣人の愛」がテーマ。

交流会前半は二泊三日のホームステイ。韓国側の

担当教区となった清州・大田教区に分かれ、韓国側の参加青年の家に一名か二名ずつ宿泊。このホームステイを通して韓国の生活、文化、習慣を知る良い体験となったようである。各小教区の主日ミサへの参加機会もあり、活気あるミサを体験できたという感想が多かった。ホームステイ中も日中のプログラムが組まれており、神の愛に応えた人々に触れるために殉教者たちの聖地巡礼、隣人への愛を体験するために小さくされた人々の施設訪問が行われ、テーマを具体化することができた。

後半は三泊四日の合宿で、清州教区のトレイニング・センターが会場となった。親交を深めるレクレーション、夕の祈りとしての洗足式、青少年担当司教司式のミサとテーマについての説教、テーマを深めるためのグループ作業、韓国青年の文化体験等、どのプログラムも担当する青年が決められていて、よく準備された実あるものだった。

韓国文化体験として独立記念館を訪問した時、韓国と日本の和解の必要性を目の当たりにした。この訪問は、お互いの違いを突きつけられる強烈な体験だった。しかし、青年たちはこの違いを受け止める強さを、交流会を通して得ており、その強さがお互いの違いを「マイナス」とするのではなく「豊かさ」とする力になっていくように感じた。同じ信仰をいだいているお恵みがそれを可能とし、そのことがこの交流会を続けていく意味ではないかと感じた。

第14回交流会は長崎管区が企画・運営にあたり、長崎開催を予定している。

「人を動かす」



社長 「有名な山本五十六元帥は言った。『やってみせて、言ってみせて、させてみて、ほめてやらねば人は動かじ』」

社員 「さすが社長！
よく分かりました」

社長 「おう、分かってくれたか。
ありがとう」

社員 「ぼくたちは動かなくても
良いということが、よく
分かりました！」

社長 「○×◆△*…」



生活教会 の中の



大崎教会

フォトプラン 山本 富夫

大崎

南九十九島を望む大崎半島の屋根に建つ教会堂。隣地には小学校、入江には信徒たちの家々がある。

この地への移住は、明治中期。平戸、黒島、大島などからという。

当初、安永家を家御堂としたが、一九一七年、「高嶽」の裾の浜辺に小聖堂を建立。七年後、用地買収に伴い「水の浦」に旧教会堂を建立した。

旧堂は時を経て老朽化し、一九七三年、新たに敷地を求め、六十戸余で現教会堂を建立した。

一九八九年には司祭館を新築し、小教区として独立。堅い信仰は、今年、教区司祭を誕生させた。